

くすり博物館だより

NAITO MUSEUM OF PHARMACEUTICAL SCIENCE AND INDUSTRY

内藤記念くすり博物館 〒501-6195 岐阜県羽島郡川島町竹早町1

Tel: 058689-2101 Fax: 058689-2197 <http://www.eisai.co.jp/museum/>

開催期間 平成11年4月28日(水)～11月23日(火)

企画展

薬の神様・神農さんの贈り物

本草の世界を見つめる

野山を駆け巡り、自ら草木を嘗(な)めて薬の発見に努めた“神農”の説話が、古代中国から二千年の時代を越えて今に伝わっています。“神農”は毒にあると薬草を嘗めては生き返り、人々にその効能を教えました。これは、薬についての経験と知識の集積が“神農”という一人の人物の業績という形で神話化されたものなのです。中国や日本においては、その徳をたたえ、医家や薬屋で代々まつられてきました。

一方、「薬」という字は、「草冠」に、「楽」と書きます。「草木」によって身体を「楽」にする薬は、漢方医療や民間療法といった治療方法の中で、今なお私たちの暮らしに息づいています。これらの薬のルーツである植物・動物・鉱物はいろいろと研究され、実用に役立つ学問として本草学が誕生しました。薬材となるものに草が多いために、「草」を「本(もと)」にするという意味で、古代中国において「本草学」と名づけられ、日本でもさらに発展しました。

今回の企画展では、永い年月を経て「神農さん」と呼ばれ親しまれてきた薬の神様にまつわる伝説を振り返ると共に、「神農さん」からの贈り物ともいえる、本草の世界をご紹介します。人類の知恵と経験から学び得た知識の宝庫・本草を見つめ、私達の身近な自然を見つめ直す機会になりましたら幸いです。



▲神農像(東京・湯島聖堂内)
普段は非公開で、神農祭の際に拝観できます

中国最古の薬物書といわれる「神農本草経」。書名に神農の名前を冠して、古代中国に伝わる薬物の知識を収録したものといわれています。後漢代の1～2世紀頃に編纂されたとされていますが、原本は古くに散逸してしまいました。しかし、ほぼ全文は陶弘景(452～536)の「神農本草経集注」(500年頃)に引用されて残ったので、近世になってから、『神農本草経』の復元本や注解書が作られました。記載された薬物数は、1年の日数と同じ365種類で、人体に作用する薬効にしたがって、命を養う「上薬」・病を防ぎ体力を補う「中薬」・病気を治すが長期の服用はつつしんだ方がよい「下薬」の3つに分類されています。



▲神農本草経

神農は、医薬・農業・商業の神とされますが、特に医家や薬屋はその姿を絵や彫塑像となし、家業を守り導く神として厚く信仰してきました。普通、頭に二本の角を生やし、草の衣を身につけた老人の姿で表現されます。



▲神農画 [木村雅経画]
<105×55>

木村雅経

号は立嶽。幕末から明治初期の狩野派の画家。文政8(1825)年富山生まれで、12歳で江戸へ出て木挽町狩野家に入門し、晴川院、勝川院に師事しました。前田利保(富山10代藩主)の命で編纂された「本草通串証図」に植物図を描いています。明治23(1890)年没。

川端玉章

号は敬亭。天保13(1842)年京都生まれで、生家は蒔絵を業としていました。幼少の頃から絵を好み11歳で中島来章に師事し、小田海僊や円山応挙にも入門しました。円山派の伝統に属し、山水花鳥を得意とした明治から大正時代の画家です。大正2(1913)年没。



▲神農画 [川端玉章画]
<195×48>



▲三皇王図(神農・黄帝・伏羲)
[青正喜画] <38×45>

中国の歴史を語るとき、『史記』などの書籍では中国文化の基礎は神農・黄帝(こうてい)・伏羲(ふっき)の三皇と呼ばれる聖天子によって作りだされたと紹介されています。古代中国の書物のうち、『易経』は、伏羲によってそのもととなる部分が述べられ、『黄帝内経』は黄帝にあやかってその書名がつけられました。そして神農の「神農本草経」と合わせて、これらは「三墳の書」と称されています。なお、三皇五帝と言われますが、この概念は後世になってからのもので、その人物構成は書籍の著者の政治的あるいは思想的立場によりいくぶん異なっています。

<>内は資料の原画のサイズ。単位はcm。



感神龍生勿論聖德陸毛
能否凡舌巧識為器教耕
億兆足食除病濟飢困炎帝
力仁術之遺永伝萬国
萬治三庚子歲国手道雪先生之囑
蕃山謹題

◀神農画 [熊沢蕃山賛]
左は、万治3(1660)年 蕃山42歳の書。 <70.3×27.3>

熊沢蕃山(くまざわばんざん)
江戸時代の儒学者。名は伯継、号は息遊軒。引退後は蕃山(しげやま)了介と名乗りました。京都の生まれで、中江藤樹に陽明学を学び、岡山藩主池田光政に仕え番頭(ばんがしら)となりました。著書『大学或問』が幕府の嫌疑にふれ、古河城内に幽閉されて没。『集義和解』『集義外書』『源氏外伝』などを著しました。

<神農を冠した薬業資料>

商品や製造元の名称などに、神農という名前を組み込んだり、包装デザインに神農の絵柄を取り入れたりするなど、神農にあやかった品物も多くみられます。



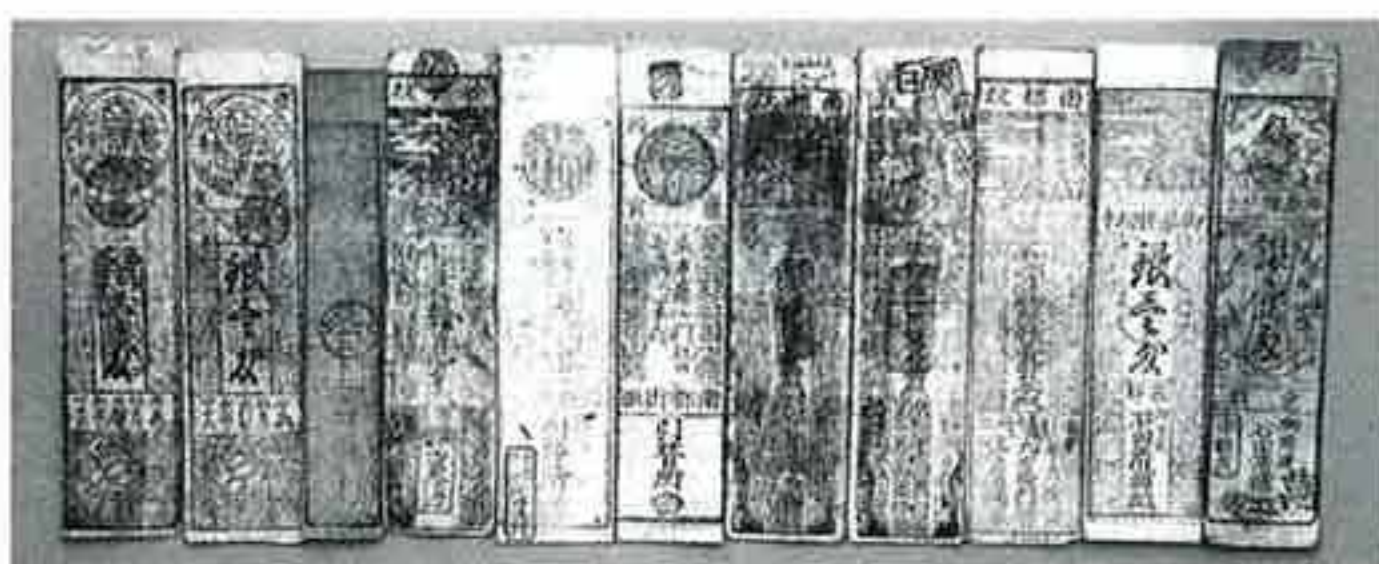
◀神農かぜくすり
神農売薬株式会社製
<10.8×7.0>

左より 薬王神農艾 ▶
関根半兵衛製/江戸時代
<24.3×16.2>
薬王神農艾
岩口屋徳兵衛製/江戸時代
<31.6×18.9>



<薬種切手>

生薬の取り引きの際、貨幣の代わりとして幕末に使われた切手形です。紙札のデザインとして、片面に神農の肖像、そしてもう一方の面には商売の縁起神である恵比須の絵が用いられています。 <各15×3.5>



▲薬種切手 慶応2(1866)年

薬草園から

『神農本草経』では薬を上薬・中薬・下薬と分類し、特に上薬は生命を養うもので、副作用が少なく、長期間服用を続けても心配がいらないとされる薬草(生薬)です。つまり上薬は生理機能が円滑に営なませ、身体の動きを軽くし、精神状態を充実させ、その結果人間の寿命を全うさせる薬草と考えられているのです。

4月から、神農に関する企画展がオープンしますので、身近にある、あるいは入手がそれほど困難でないいくつかの上薬(植物)の薬効についてご紹介しましょう。

▼薯蕷(しよよ)

ナガイモの肥大根で、いわゆる「とろろ芋」として食用にする部分です。主として、体が弱って衰えた者の元気を補い、内臓の機能を傷つけた病を治したり、肌の肉付きをよくする働きがあります。

▼薏苡仁(よくいにん)

ハトムギの種子で、最近ではイボ取りや皮膚の荒れに効くとして、漢方薬としても薬用茶としても有名です。『神農本草経』では主と

して身体の自由がきかなくなる症状や、血や気の流れが滞ることで痛みやしびれを生じるときに用いとされます。

▼決明子(けつめいし)

エビスグサの種子で、漢方で緩下・強壯・利尿薬とされます。また、その名からもわかるように目の症状にも大きな効果があるとされます。最近では薬用茶として知られています。

▼牡桂(ぼけい)

聞きなれない名前ですが、肉桂(にっけい)・桂皮のことを『神農本草経』ではこのように呼んでいます。英語名はシナモンです。咳や、喉が腫れて痛み、呼吸が苦しい症状に用いられます。また、関節の機能や内臓の動きを補う作用もあるとされています。スパイスとして料理やお菓子に用いられることで有名です。

▼胡麻(ごま)

クロゴマの種子。主として内臓の機能が傷ついたり、弱って衰えた症状に用いられますとされます。

『神農本草経』の上薬の植物

また、漢方医学で「五内」とよばれる肝・心・脾・肺・腎の機能を補い、体力をつけ、肌の肉づきをよくするとも言われています。

これらは120種ある上薬の、ほんの一部の紹介です。ナガイモやゴマなどは身近な食品のイメージが定着していますが、中国で最初の本草書といわれる『神農本草経』で既に名前が挙げられています。先人たちの先見の明に敬服するとともに、現代までその知恵が継続していることに更に敬服させられます。ちなみに『神農本草経』では上薬を用いると、「仙人の境地に通じ、身の動きが軽くなり、年をとっても老いさらばうことが不(な)い」といわれています。

参考文献：『(意訳)神農本草経』
浜田善利 小曾戸丈夫 著
築地書館 1976

薬用植物園 主任 白井英夫

薬草説明会と薬草栽培教室

今年も薬草の花の季節が到来し、4月の第1日曜日から「薬草説明会」が始まりました。説明会は平成5(1993)年にスタートしていますから、今年で7年目を迎えました。栽培されている薬草や薬木は約600種類あり、毎年同じ時期にお話ししていても、その年の天候によって取り上げられる植物はどうしても微妙に変わります。皆様それをご存知なのでしょうか、何年も続け

て参加される方もいらっしゃいます。また、雨天時も可能であれば薬草園をまわっていただき、いつもとは一味違う薬草たちを見ていただいています。もちろん室内でスライドによる説明や実物を持ち込みでの解説もあり、1年を通じて薬草に親しんでいただけるかと思えます。特に予約は必要ありませんので、11月までの第1日曜日にはぜひご参加ください。

なお、1年コースで薬草の栽培と利用を学ぶ「薬草栽培教室」については定員30名の公募に対して7倍を超える応募がありました。これから毎月1回の活動を通じて、薬草の育成を楽しんでいただきたいと思います。なお、毎年2～3月に次年度の会員を募集いたしますので、ご興味のある方はその時期にお問い合わせください。



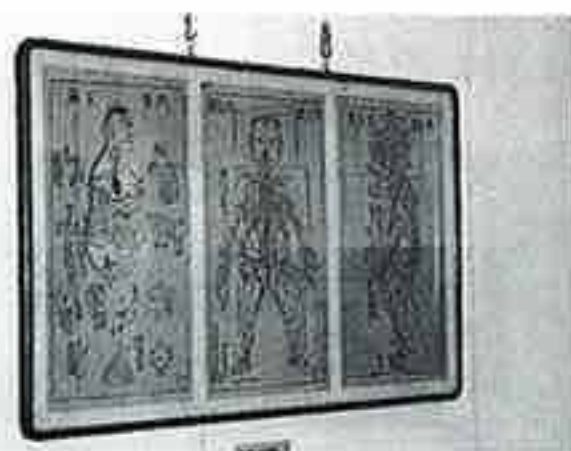
TOPICS

<新収蔵資料紹介>



▲袋看板<24×60×120>

お父様の代まで営んでいらしゃった江州(ごうしゅう)屋という漢方薬局がこのたびの道路拡張工事できりこわしになるため、薬袋の形をした袋看板や変わった形の生薬入れ、製薬道具、古今の珍しい図書類を多数ご寄贈いただきました。また、暉峻様はご所蔵の江戸時代の解剖図「内経之図」など貴重な絵図を3点ご寄贈いただきました。



▲内経之図ほか<62×108>

吉田研様と暉峻(てるおか)衆三様ほかより資料のご寄贈がありました。吉田様は、埼玉県深谷市で

<医学会総会>

第25回日本医学会総会が3月30日から4月7日まで東京ビッグサイトで開催されました。くすり博物館は第1館「演習座」に絵馬・病除けの郷土玩具などの写真を提供しました。また、これに合せて三越日本橋店において「身近な健康とくすりの歴史展」を3月30日から4月4日まで、同展実行委員会と共催で開催いたしました。国立科学博物館で特別展を開催して以来、東京での展示は7年ぶりとなりました。なかなか岐阜までおいでいただけない方にも楽しくご覧いただけたかと思えます。もっとたくさんの資料をご覧になりたい方はぜひくすり博物館へ直接おいでいただきたく思います。



■くすり博物館が紹介されました

医薬専門図書のプレーン出版からクレアタ・薬と文化の会編の『くすり好き、医者好き』が刊行され、この中で三宅館長によりくすり博物館が13ページにわたって紹介されました。このほか、TVでは日本製薬工業協会の特別番組や岐阜放送の植物画作品展紹介などがありました。

■植物画講座作品展

今年で6回目を迎えた植物画作品展には47名の方から出展いただきました。ハンドブックの原画展だった昨年とは違い、今年はペン画、彩色画など様々な手法で薬草や気に入った植物が描かれていました。



■収蔵資料が各地で展示されました

シーボルト記念館の特別展「オランダわたりのお薬展」(平成10年9月24日～11月29日)では西洋薬の描かれた錦絵が展示されました。また第11回全国健康福祉祭愛知・名古屋大会(11月1日～7日)では石臼・薬研・薬草などが展示されました。年が明けて、名古屋市博物館の企画展「尾張の天王信仰」(平成11年1月23日～2月21日)では牛頭天王の姿が描かれた『諸神の加護によりて良薬悪病を退治す』が展示され、多くの見学者が訪れたとのことです。可児郷土歴史館の「人と動物展」(2月20日～3月22日)では牛に関する展示として牛痘を勧めた『種痘奨励の引札』が展示されました。

▶お詫び◀「くすり博物館だより」40号P4新収蔵資料の写真で、吸入器のガラス部が左右逆に組み立ててありました。お詫びして訂正します。

<資料・図書寄贈者ご芳名>

青木歳幸 伊東陽二 岩谷成彦 岩治勇一 岡本保治 北沢元一 倉橋正直 国際日本文化センター 後藤二三郎 酒井利彦 篠田達明 杉立義一 杉本茂春 杉山茂 鈴木昶 第一製薬(株) 大日本製薬(株) 田辺普 暉峻衆三 豊岡病院 中西啓 長門谷洋治 陽川昌範 藤沢薬品工業(株) プレーン企画(株) ホソカワミクロン(株) 間壁霞子 水野博之 水野瑞夫 宮崎富識 吉田研 四ツ柳智久 ありがとうございました(五十音順/敬称略)

館長 三宅康夫 学芸員 稲垣裕美(編集担当) 学芸員・司書 野尻佳与子 伊藤恭子 庶務 森田麻起子 説明員 小島敦子 市橋由志子 薬用植物園主任・学芸員 白井英夫 作業員 栗本省三 荻谷辰行 顧問 青木允夫 藤原伊予 逸見誠三郎 内藤記念くすり博物館 開館/9:00～16:00 休館/月曜日・年末年始(12/28～1/8)